

地震発生 2011年3月11日（第9回会合は地震発生の翌月2011年4月6日開催）

『東日本大震災』の放送報道を考える」

- * 放送報道、とりわけテレビの震災報道をどのように見たか
- * 今回の震災報道の教訓をどう生かせばよいか

出席者の意見を総括すると次のようになる。

NHKの震災報道には100年の歴史に支えられた厚みがあった。民放各局もよく健闘したが、視点の定まった、角度のある情報の提示と解説力にやや欠ける面があった。

今回の震災報道が地震、津波に加えて原発事故というこれまで経験したことのない災害報道が加わったため、阪神淡路大震災の報道とは違った展開となった。とくに民放の場合、原発に対して専門的な知識を持った解説者（識者ではなく自前の専門記者）がいなかったことが報道内容の質の面に表れたといえる。

テレビは電波を通じて情報を流すため、新聞と違って映像も言葉も瞬時に消えてしまうメディアである。それだけにこのような災害時において情報が正確に視聴者に届いたかどうか、情報の処理の仕方、伝え方など時間をかけて検証する必要がある。

新聞の伝え方、活字の文法はすでに確立している。長年研究され、“かたち”が定まっているが、放送、とりわけ映像メディアであるテレビの伝え方にはまだ課題も多い。例えば、ニュースや報道番組の今のキャスターが適格者であるかどうか、また改めてテレビの震災報道を考えたとき、同時性、速報性といったテレビの特性を生かしつつも、さらに情報をせき止め、その意味を汲み取って視点を定めて伝える報道姿勢（オピニオン性）を求める意見もあった。このほか議論になったのは、震災特別編成（CM抜き）から通常のレギュラー番組に移行する時期とそのタイミングの問題、そして“しつこい”と抗議を受けたAC公共広告の問題などである。

東海、東南海、南海といった広域大地震の同時発生というリスクをかかえる関西の放送局にとって、今後、放送活動のテーマとして震災報道と真摯に取り組む姿勢が求められる。

以下は主な発言。

司会

私は東北が地元で本籍がいわき市で、本家が気仙沼にある。ゴールデンウィークには気仙沼まで見舞いに行こうと思っている。そんな中、以前から約束があったので予定通りこの3月15日から22日まで中国に行ってきた。

あの国の震災報道のリアクションに驚き、流言飛語の恐ろしさに惑わされながら帰ってきた。帰りの飛行機は大きなエアバスで定員350人のところ、50人ぐらいしか乗っていなかった。しかし行くときは満員で飛行機の客層がいつもと違っていた。いわゆるおじさん、おばさんみたいな、急きょ避難して中国に帰る乗客が多かった。

さて今日は、地震発生（3月11日）から26日、後輩たちの善戦健闘を思いながら、改めて「東日本大震災」の報道について考えてみたい。

震災報道をどのように見たか、この教訓をどう生かせばよいか。みなさん一人ひとりのご意見を伺いたい。

「民間放送」の最新号には、地元のラジオ局が健闘していることを伝えている。「停電のため自家発電に切り替え安否情報や生活情報を伝え続けた」、またコミュニティーFMも活躍し、ラジオを通じて被災者同士が絆を深めたと新聞は伝えている。

<ラジオの震災報道は？>

- ◎ 東北には、東北放送のようにラジオ局として実績のある局と、その後に関局した新局などがあるが、他局はあまりラジオに強い伝統のある局がないのではないかと。関西は、大阪も神戸もラジオは伝統があり、阪神大震災のときもよくやった。
- ◎ 神戸の時は、発生直後のレポートに大地震であることを推測するような情報（第一報）がラジオから流れ、全国的にも話題になった。今回はあの時のような特筆すべきレポートがなかったが、地元では安否情報や生活情報をきめ細かく放送していたのではないかと。東京TBSのラジオ番組（パーソナリティー・小島慶子）は関東圏の被害に絞って情報を伝えていた。
- ◎ 今回の震災報道を見ていると、民放は東京中心の報道になっている。NHKは全国的な視点に立ち報道していた。その点が評価されたのではないかと。
- ◎ ラジオはネットワークがないので、東北放送も独自の編成で震災報道に絞って緻密ないい情報を流していたのではないかと。ラジオはパーソナリティーの魅力でリスナーをつかんでいるので、いいパーソナリティーがおれば、震災報道もよく聞かれていると思う。
- ◎ 阪神大震災の時は被災地とちょっと距離を置いた大阪で、客観的に聞いたり、見たりすることが出来た。今回のケースでは仙台、盛岡、福島で放送していても、もう少し離れたところで聞くということができないので、メディアで話題にならなかったのだろう。

<原発報道と“発表報道”>

- ◎ 阪神大震災の報道と異なる点は、原発中心の報道になっていたことだ。ただ原発報道を見ていると、官房長官とか、原子力保安院、東電とか、担当者の会見ばかりで、“発表報道”になっている。もっと根源的な問いかけをする報道ができない

ものか。

- ◎ 一見“発表報道”に見えるが、何も分かっていないのが現実ではないか。とって、一般論で原発の有り様を問うてみてもこの段階（初期）ではできない。それが早すぎると問題が出てくる。今は事実を知りたいというときに原発の話(一般論)をされても明日、あさってにしてほしいと思ってしまっただろう。難しい問題である。
- ◎ 阪神大震災の時にも、現実が動いているのに特に東京発の番組で地震の解説を始めたことに対して批判が集中した。
- ◎ ある時点までは今起きている事実、現実を教えてほしい、そしてしばらくしてから違う視点で伝えてほしい。ジャーナリスティックなキャスターがすばやく原発の問題を取り上げる、そのことはすばらしいのだが、見ている側からすれば、ちょっとそれは今じゃないのではという気がする時がある。その判断がなかなか難しい。

<想定外の災害ではない>

- ◎ 想定内、想定外という言葉がよく出ているが、私は瞬間的に想定外ではないと思った。想定内のことをないがしろにしたから、この事態が起きた。放送ではキャスターを含めてみんな想定外、想定外と言っているが、あれは間違いである。少なくとも原因は別にして、想定しないといけない。三陸沖の険しいところ（明治三陸地震など）では津波を警戒するのは常識のはず。それを平気で想定外というのはおかしい。
- ◎ なぜ想定外だったか、それは歴史的なことだから関係ないと言った局があった。これを聞いてびっくりした。
- ◎ それにもう一つ原発の解説に出てくるゲストがいままで審議官を含めて東京大学ばかり。少数意見とか、反対意見のグループが全く封じられてきた。多分、原発問題というのは今後の総選挙の大きなテーマとなる。個人個人の命に関わる問題だから、国民投票を実施して問うほどの問題だと思う。国がやらなければ、関西エリアだけでも実施すべきである。関西には日本海側に原発が並んでいる。だからそういう意識を持ってこれから報道していただきたい。これは僕の熱い思いである。今着々と事実報道しなければならぬ。それがOBの使命だと思う。
- ◎ 少数意見に関連して、NHKも含めて震災報道に苦勞しているようだが、今テレビに出演して情報を伝えているのは、官房長官、原子力保安院のメンバーか、東電の担当者で、原子力安全委員会の学者グループの意見が出ていない。インターネットでは原

子力安全委の学者の意見も吸い上げている。それをメディアが扱わないので国民にも知らされない。偏った情報が流れている恐れがある。

<毎日新聞「検証 大震災」の記事 評価>

◎ 今回の震災報道で最も注目すべき報道（記事）があった。おととい（4月4日）の毎日新聞の特集「検証 大震災～なぜ東電は指示聞かない～」（1面、18、19面）

発生の3月11日から2日間を官邸、保安院、東電の動きから克明に追跡、検証した報道（福島第一原発・津波・燃料棒溶融・爆発）。やっとうんとうのことを書いてくれたという思いだった。そしてマスコミらしい報道であった。他の報道機関がフォローしないのはお粗末。総理が言ったことを（東電が）丸まる一昼夜ほったらかしにしていたということを毎日新聞は暴露しているのだ。

NHKは公共放送で国民の放送機関だから、現場報道、進行報道というスタイルで当然やるべきことをやった。毎日新聞はそうではなくて自分たちの取材の目と良心で検証、分析し、記事にしている。民放はこれからそういった状況を踏まえてほんとうの報道をしなければいけない。発表されたことをハイハイと言って書いているだけではダメで、自分で視点を定めて取材していかねばならない。といってもあれだけの災害であれば、放送記者、技術関係者の方も自分の家族の安否の確認だけで精一杯で出社できなかったかもしれない。

私の局ではこういった災害に対応できるようマニュアルを作っているが（30年前）、本だけでは役立たないので折々こういった意識を確認しながら行動していかないといけない。NHKの場合、今回の報道は100年の歴史が支えた組織と機器・設備の充実で成しえたことで、頭が下がる思いである。

<今回みなさんは「東日本大震災」報道を通していわば同じことを体験したわけで、「メディアウオッチング」としては“震災報道をどう見たか” “この教訓をどう生かすか” という方向で、一人ひとりに語っていただきたい>

<反対者の意見、少数意見を平等に 報道姿勢に注文>

◎ 昭和の時代が終わったときに、世の中の“かたち”が変わらなければならなかったのに何も変わらなかった。昭和の政・官・財でやってきたツケが平成時代にまわってきたというべきか。原子力発電の問題も政・官・財で決めた。そこにメディアも入っている。今後すべてを変えるという心構えを持たないと、この国は滅びる。最後のチャンスだと思う。僕は三度目の惨事だと思う。第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして今回は三回目に相当するくらい大きな被害が出た。世の中を変える大惨事が起きたのではないかと。癒着構造から全然抜けきっていない報道の仕方を変えないと、ダ

メだと思う。つまり少数者の意見、反対者の意見を平等に扱うという報道姿勢をとらないといけない。これまでの報道は正直言って発表報道だけを追っかけているという印象を持つ。

- ◎ これまで政・官・財がいっしょになって知恵とお金を集め、マスコミも入れて“どうすればこの国がまとまっていけるか”を考えるチャンスがあった。しかし 1980 年代のバブル期に浮かれてしまい、平和と裕福さを楽しんでしまった。そのツケがまわってきた。備えあれば憂いなしというが備えがなかったことになる。

もう一つ言いたいことは、関西民放クラブとして、「3・11」のあと数週間の民放各社の取材・報道体制を現場に行きって調べ、何らかの形で検証していただきたい（半年ぐらいして世の中が落ちついてから）。NHK、民放各局の震災報道についていろいろな意見が出たが、やはり実際に現場を見てみないと説得力に欠ける。ほんとうは民放連が中心になってやるべきことだと思うが、阪神大震災の経験から、関西で「東日本大震災」の報道を研究、総括して次の世代の教訓にしてはどうだろう。みんな安心すると思う。

<原子力の知識がなさ過ぎる>

- ◎ 昨日（4月5日）から原発内にある低濃度の汚染水を海に流し出した。公式発表では大きな災害を防ぐためにはやむを得ない処置だと言っているが、早速汚染水の垂れ流しに対して韓国が懸念を表明している。インターネットニュースでは原子力委員会が汚染水を廃棄した大型タンカーに詰めて深海に沈めれば、何十年かは隔離できるのではないかと東電に提案したが、東電は断ったと伝えている。

- ◎ 我々は、原子力についての知識がなさ過ぎる。（低濃度でも汚染水を垂れ流すことが）とんでもないことなのか、それともたいへんな災害を防ぐためにはやむを得ないことなのか、悔しいことに全然判断できない。

- ◎ 40 年前、関西電力から（原発の）コマーシャルを放送したいと申し入れがあったときに CM セクションは大反対した。当時そのくらい重要な問題だと認識していた。それがなし崩しにいつの間にか（原発の CM が流れていることが）当たり前のことになってしまっている。あの頃もっと真剣にすべき問題だった。それをそのまま見逃したということが問題である。

<解説者は肩書きのある先生ばかり、もっと現在の知識を持つ実力者を>

- ◎ ごく当たり前のことが実行されない世の中、特に日本においては、法律で単純に解釈すれば、ただそれだけでよいものをぐちゃぐちゃ言って実行できないことが多すぎて、

それが今回の場合も表れている。政治のことも含めて、実行が前のほうに進まないことにたいへん危惧している。それにもう一つ、テレビの震災関連番組でいろいろな学者が出演して解説しているが、そういうメンバーでいいのか、私は疑問に思っている。こんな事例がある。京都府が東寺所有の古い書物（100 篇）を国宝指定受けるため 50 年以上調査、研究したことがある（1997 年国宝指定）。その研究の中心になったのが京都府資料館の職員であった。世の中には知られていないが実力があって評価の高い集団である。例えば（原子力について言えば）ほんとうに知っている人は誰か、それは功成名を遂げた教授や名誉教授ではなく、現在の知識を持った実力のある助教授クラスの人たちだと思う。そういう学者を招いて解説してもらったほうがよい。今回の震災報道を見ていると、名の知れた肩書きのある東大や京大の先生ばかり出演させている人選が気になる。

- ◎ 一視聴者として震災報道を見た感想。まず世界の多くの人々が応援してくれたことに驚いている。日本の存在を小さなところまで知らしめてくれたことを再認識した。それから地震・津波発生から 4 日目だったか、民放が震災以外の番組から徐々に通常の番組に切り替えていったとき、夜 11 時ごろ突然吉本のお笑いタレントがテレビ画面に出てきてびっくりした。直前まで見ていた震災関連番組とその落差が激しすぎて、“私たち、今までこんなの見ていたのか”とショックを受けた。平和ボケしているし、この際一から放送番組を見直して、何を放送すべきか考えてほしいという感想を持った。

<震災とコマーシャル、そして公共広告>

- ◎ NHK は 24 時間体制で震災の現状を伝え続けた。各民放も CM をとばしてそれぞれの立場で頑張った。2, 3 日経って、その状態が続いている中で心配したのは“これでまた赤字が出るのかな”という思いだった。3 日目か、CM が復活し始めた。ところがよく見ると、AC の公共広告ばかりだった。AC は民放各社、企業、団体などが金を出し合って、啓発のための CM を制作しており、もともと、空き枠があれば、穴埋め用に放送する CM だった。ところが今回ほぼすべての CM 枠にどっと AC 広告が流れたため、視聴者から「しつこい」の抗議が殺到した。このような事態になればスポンサーがつかないということが分かっているのだから、どうして CM 枠をつくるのか疑問に思った（既定の CM 枠だけは死守してくずさない放送局の姿勢が問題であるとする識者も）。せめて放送するのなら、ステブレ枠だけでもいいのではないかと思った。それから震災特番に出演する解説者はどの局も、もう一つ頼りないという印象で納得できる人材がいなかった。各局とも人的資源を大事に育てる必要がある。的確な人選をしてほしい、中途半端である。

<情報の発信者・発言者の“質”>

◎ テレビを見ていて、このような事態をどう伝えるかということ、情報の発信者、発言者から感じ取ったことがある。首相の会見、官房長官の会見、原子力安全・保安院（審議官）の会見、東京大学の解説者、アナウンサー、司会者、コメンテーター、そういう人たちの発する言葉、その言葉の質のようなものが感じられた。十分分かったわけではないが、東京電力という会社がどのような体質の会社なのか、（一連の）会見を見ているとよく分かる（清水社長のことが“コストカッター”などと報じられていた）。民主党内閣というものもどんなものかというのが分かる。天皇陛下の言葉はやっぱり先入観なしで聞いたら（読んだら）、非常によく考えられた、よく気持ちの出た（誰が原稿を書いたか？）なかなか立派なものであった（他と比べて）。もう一つ復旧現場を映し出す画面に出てきてもいいものが出てこない。それは何かといえば、小松（製作所）という世界一儲けているメーカーの重機である。手持ちの機械をいっぱい持ってきて、小松という名前を出していいときに何の動きもない。産経新聞によると、建設業界は公共事業をカットされ、不況で機械を安く売った、それが全部中国にいつているという。このような非常時に、日本を代表する企業の重機が（被災地で活動している姿）がないということは、小松というのはそういう会社だったのかと見られても仕方がない。こんな話もあった。京都の飲み屋での話、京都のホテルオークラに泊まっている人がその店に飲みに来た。名詞の住まいは東京のホテルオークラになっている。これは何をしている日本人かといえば、外国から帰ってきてホテル住まいをしていると話していた。要するに金持ちは何も動かない。東京のスーパーで品物がなくなった。なぜか、被災地に送るために買いだめに走ったかと思ったら、そうじゃない。自分たちのために買った。今度の一連の震災報道を見ながら、“東京”というものを感じた。大阪との違いも感じた。世界と日本の問題も感じた。世界から支援を受けるのは当然だ。思惑があろうがなかろうが。このときに中国は何をしているかといえば、東シナ海でちょろちょろ動いている。こういう動きを日本人はちゃんと見ておかないといけない。感じたことは以上のようなことだ。

なぜこのような事態になったかという点については、これはメディアの責任が大きい。我々の社会ではちゃんと判断できる市民がいるから、民主主義が成り立っている。その判断する材料を提供するのがメディアなんだが、例えば原子炉の問題などについては、そのメディアが的確な情報を提供してこなかったかもしれない。なぜこうなったかといえば、民主党政権だからというのも一つ。なぜ民主党が政権をとったかといえば、選挙のときメディアがちゃんとした情報を伝えなかったということもある。「大阪維新の会」躍進の背景にも、肝心なことを何も伝えてこなかったメディアの責任がある。新聞もテレビも、大阪のメディアの責任を感じる。

◎ テレビもオピニオンの枠を持つ時期がきていると思う。

<新聞の震災報道 初期段階から存在感を>

- ◎ もう一つ最後に言いたい。地震報道についてメディアはどうであったか。テレビの役割はある程度は果たせたと思う、甘いかな。ラジオは現地の状況が分からないが、ちょっと消化不良であった。新聞は初期の段階でテレビと同じことばかりやっているという声を聞いた。その段階では仕方なかったと思うが、初期の段階からテレビとは違う角度で紙面づくりをしてもよかった。テレビではない、新聞メディアとしての独自の存在感を最初から出してほしかった。最初から政府を批判せよという意味ではない。しかしたいへんだったと思う。あまり注文してもいけない。インターネットは通信としての役割はあったけれど、我々がいう情報伝達メディアとしての役割を果たしたとはいえない。地震直後に東京に行って、本屋で福島原発を特集した「岩波ブックレット」を見た。今起きていることがすべて記されている。そして全部隠しているとしている。4、5年前に出版された本である。国の都合で何でも言うのが東京大学、そういう人たちがいるのが東京だ。この際東京と大阪の問題というのをもう一度考えないといけない。

<大阪大空襲といっしょや、これは“敗戦”や>

- ◎ みなさんの話と重なるかもしれないが、二つのことを話したい。一つは提案というか、震災報道の経過を検証すること。テレビは震災発生後、いつからコマーシャルを抜いたか、CM 抜きの状態がいつまで続いたか、AC の広告が全部埋まったのはいつか、AC という音声が消えたのはいつからか、以上のようなことを関西民放クラブ（各局も調査すると思うが）で記録して、その上でそこから何が学べるのかということ話し合ってもいいのではないか。そして総括し小冊子にまとめるわけにはいかないか。個人的に震災をどう思ったかということだが、発生時、外出していて揺れたのを知らなかった。そして夕方からテレビを見た。その時感じなかったのだが、何日かして新聞で被災地の写真を見て、“大阪大空襲といっしょやな”と思った。実は 2009 年、旧制中学の仲間と文集を出した。そこに大阪ミナミの全焼した風景と同じ場所の現在の写真を、いずれも見開きの大きなサイズの写真（空撮）を掲載した。そのモノクロの空撮写真を見てそっくりやなと感じた。ああやっぱり“敗戦”やったなという思いがした。なぜ敗戦かということ、作家の司馬遼太郎が NHK のテレビ番組雑談「昭和への道」（一人語り）で、なぜあの戦争を起こしたのか、大正末から昭和 22 年までを総括しているのだが、そこで司馬さんが“魔法の森に迷い込んだのや”それでは“誰が魔法の森にいざなったのか”といった展開でいい話をしておられる。また作家の半藤一利さんが、日本軍というのは特に参謀軍令部は“起こってはならないことは起こらないことにした”と断定している。まさに今回の地震は、起こるべくして起こったのか。というのは日本の官僚は高度

経済成長を成し遂げたが、太平洋戦争の敗戦から何も学んでこなかった。だから起こるべくして起こったのだと思う。つまり起こっては困ることは東京電力も起こらなかったことにしようということにしたのだろう。という風に我々は昭和の戦争と同じように魔法の森にいざないこまれているんじゃないか。このことも考える必要があるのではないか。

- ◎ 100年前に時計の針を戻さないといけない。そこから再スタートしないと日本はどうしようもない国になるという感想を持った。特に首相とか、官房長官とか、重要な関係者の言葉遣いにへどが出るというか、いかに日本のエリートたちの知的水準が落ちてきたのではないかと思う。日本の社会の組織が組織疲労を起こし、機能していないのではないかと直言したい気持ちになった。あるときから、首相、官房長官の会見はいつさい見ないことにしている。少なくとも50年（私は満州から引き揚げてきたが）その時の生活に戻って、そこまで戻ればどんなことでも耐えていけるのではないかと思うようになった。

<進行形のメディアだが、情報は一旦せき止め、意味を汲み取ってから流そう>

- ◎ これまで高い次元の話が出たが、私は（震災報道の）個別の話をしたい。テレビの初期段階の報道を見て、阪神大震災のときと同じように、結果的には情報の“たれ流しに近い状態”になっていたという気がした。つまり放送メディアというのは、“進行形”のメディア（同時性、即時性）だと言われている。（災害時においてテレビは）、新聞社のように入ってきた情報を一旦編集者が受け止め、それをどのような角度で、どう伝えるかということを考える時間も無く、情報を取得してほとんどストレートにそのまま電波に流していく性格を持っている。特に初期段階、発生から2、3日、そのメディアの特性を生かした放送になるが、その特性を全面的に生かそうとすることによってマイナス面を引き起こしていないだろうか。画面を見てメリハリがない（生活情報の流し方、情報の定時性など）、情報を整理、確認しないまま放送してしまうので混乱を招いたり、誤報を引き起こしたりする心配さえある。
- やはり発生直後の初期段階から、どこかで情報をせき止め一度編集者が見たうえで（それはきちっと編集、構成するという意味ではなく）その情報の意味を汲み取り、情報の出し方、伝え方を考え報道していく姿勢が求められるだろう。
- もう一つ、CM抜きの震災特別編成から通常のレギュラー番組に移行する時期の問題、今回のように地震、津波そして原発事故が重なり、長期化の恐れがある災害時、民間放送としてどのような放送のあり方が望ましいか、民放のあるべき放送についても考えておく必要がある。朝日新聞によると、発生直後からCMなしの災害特番に切り替えた民放各局のうち、最長のテレビ朝日の場合、74時間連続でCMを放送しなかった。阪神大震災と比べると、2倍の長さになるという。そして番組編成がレギ

ューラーに戻り始めた段階で、ACの公共広告が問題になってくる。こういう状況の中で、大多数の視聴者は民放に対して何を望んでいたかを考えてみたとき、視聴者の中にはひょっとすれば震災関連とは全く異なるジャンルの番組を放送してほしいと思っている人がいるかもしれない（被災地をかかえる放送局とそうでない放送局とではその対応が異なると思うが）。先ほど、深夜にテレビをつけたら吉本のお笑いタレントが出てきてびっくりしたという話もある。二度の大震災を経験した我々は、今改めて災害時における民間放送のあり方、役割を考えてみてもいいのではないか。

<“民放らしい放送”は存在するのか>

◎ 今の話、難しい問題だが、実際に放送を出す制作者側からすれば（ストックのメディアなのか、フローのメディアなのか、メディア論はさておき）、やっぱりその時、入ってきた情報は即時放送したいと思うのは仕方のないところもある。すごく難しいなと思いつつ聞いていた。だが大事な問題だ。仮に“民放らしい放送”そのような放送が流れたら、視聴者はすごく腹立つだろうと思う。多くの視聴者がどうだったのかという点についてはもっときちんと調べなければいけない。だが、多くの人がそうだったから、もっと民放らしい放送をすればいいのかといえば、それも要望に沿えばいいということでもないので極めて難しい問題だと思う。

◎ ちょっとはさむけれど、“民放らしい放送”があったかどうかといえば、全部ないんだよ。民放らしい放送というのがあったら、一日、二日でぱっと変えられる。ところが全然なかったということを感じる。吉本だけじゃなく、吉本のちょっとまじな番組、ドラマでも何でも。民放の番組というのは、テレビが誕生したときのことをもう一度考えて、どのようなジャンルのものがテレビにふさわしいか、テレビに向いているのか、といったことを考えないまま今日に至っている。だから災害時に切り替える番組がなかったといえる。何か放送するものがあるか。そこへ「龍馬が行く」を出しても、そんなものはおかしい。古典落語を放送してもおかしい。何かあるだろうか。新聞だったら、何でもある。

<東京と大阪のトップ記事比較>

◎ 地震発生時に聞いた二つの話を紹介する。一つは元毎日新聞記者の話。今度の地震のあと、東京の紙面と大阪の紙面とがどう違ったか調べ始めた。調べて分かったことは、先入観としては、東京のほうが原発関連記事が多く一面トップに掲載しているだろうと思っていた。ところが調べてみると実はそれが逆だったことが分かった。どちらも原発の記事が一面トップに出ているのだが、毎日新聞では大阪の紙面のほうが原発関連の記事が一面トップに掲載されている日が多いことが分かった。これから他紙についても調査するが、それは一体なぜだろうかという問題提起をしていた。

(東京の新聞と大阪の新聞がなぜ違うかといえ、東京の人にとって一番大事なのは通勤難民とか、計画停電で電気が止まることだ。そういうところが東京より、大阪のほうがグローバルな視点を持っているといえる)。

もう一つの話は、今日、福島の放送局にいた人から聞いた地震予知の話。東南海大地震が 30 年以内に起きる確率が 70% (ある学者の見解)、東北地震 (宮城県沖 M7.5) が起きる確率は 30 年以内に 99% とある学者は言っている。99% はたいへんだと福島でずいぶん叫んだが、東京では全然相手にしてくれなかった。もし東北地震が 99% の確率で起きるということを取り上げてくれていたら、日本の中でもう少し地震についての対応が違っていただかもしれないとその人は残念がっていた (会議当日 4 月 6 日付「読売新聞夕刊」2 面に“東北に巨大地震 予測” の記事)。

<東北の民放 予算削られ疲弊>

- ◎ 民放の取材体制で言うと、東北放送も岩手放送も全くダメだった。テレビユー福島もダメだった。東電だけでなく、民放各社もコストカッターがいて予算を削っているから、こういう事態が起きても対応できるような体制になっていない。昔はその体制はあったが、今はない。福島では福島テレビは違うようだが、多くの局が疲弊している。

今度の民放取材がどうであったかというのを検証するため、応援に行ったスタッフが帰ってきた時点で (来月ぐらい) その人たちを集めて、シンポジウムを開くという話が出ている (関西と東京でそれぞれ 1 回)。実現するかどうか。

最初の話に戻すと、発表報道のたれ流しでみっともない、恥ずかしいということだったが、やはりその時点で入ってきたニュースを伝えなければいけないという思いからいえば、それはそれで仕方がないのではないかという気がする。そういう意味でもっときちんとした解説者がいて、政府の言っていることがダメだとか、総括できる人がいれば、見る側としてはすごく安心できる。しかしそのような学者がいるのか疑問、僕はいないのではないかと思う。

- ◎ 大きな地震は三度目。戦後 3 年目に福井大地震に遭遇、その時は滋賀県にいた。今回の地震は東京にいる家族が福井より大きな揺れを感じたと言っていた。先ほどから話題になっている原発の報道はもう少し工夫の余地があると思う。今日は名前があがらなかったが、神戸大に批判的な先生がいたが、日本の原発に関する学会では少数派である。学会では東大の権威主義が先行している。共感ジャーナリズムといえ、民放各局は今回、健闘したといえる。これからその経験をどう生かすかが問題だろう。阪神大震災のとき、マスコミ学会で某公共放送のコメンテーターが出て、しゃあしゃあとしゃべったのには腹を立て

て、同僚の会員と“あれはなんだ”と語り合ったのを思い出した。

生活情報など情報を決まった時刻に流す情報の定時制の問題については、多面的な放送を考え、テレビ画面に流す方法もあるのではないか。

- ◎ テレビ画面が多様化する中で、文字スーパー情報についてはその効果の面から見て、はなはだ疑問。放送局が“これは大事な情報ですよ”と視聴者に訴える形で流しているかどうか、一度検証してみる必要がある（あとからビデオを見てみると、JNN の画面には文字スーパーがあふれ、ANN の画面は比較的文字スーパーを抑えた感じだった）。

<テレビ本来の“伝え方”とは>

- ◎ 阪神大震災、それに今回の東日本大震災と、二度の震災報道を経験したので改めて放送が、テレビが、本来どう伝えるべきか、あるべき姿を話し合ったほうがいい。一度総括すべきである。新聞はこの 100 年、その経験を生かして紙面づくりをしてきた。新聞の伝え方、その活字の文法は確立している。長年研究され、”かたち”が定まっている。しかし放送、映像メディアであるテレビの伝え方には大きな問題がある。その一つに伝える人間の問題がある。ニュースや報道番組の今のキャスターが適格者であるかどうか。適格者でない人もいる。最近の記者は、記者会見で会見する人の“顔”を見ないで取材している。菅直人の顔とか、その表情を見ないで会見を取材して原稿を書いている。パソコンのキーばかり見て、会見する人の顔（表情）を見ていない記者がいる。パソコンのない時代には、会見する人の顔を見て、ちょっと自信なさそうな話については突っ込んで取材したものだ。それは映像の問題でもある。映像でごまかしている。伝えるという活字の問題とまた別の問題がある。その辺はテレビとしては新しい課題である。
- ◎ 今の放送記者はテレビカメラの前で話をしたりする点では表現力がある。ただ、さまざまな事象に対してどれだけの予備知識を持っているか、また鋭い切り口で対象に迫れるかどうかについてはまだ十分とはいえない記者がいる。専門記者が育っていない点など根本的には民間放送の組織の有り様に課題があるのかもしれない。
- ◎ これからの原発報道は難しいが、安全神話が崩れ、少しはやりやすくなったか。放送はサーチライトだということから言えば、論説し、解説し、知識を与え、専門家を育てる、それをやらなければいけない。また少数者の意見をどこまで吸い上げることができるか。どのような形でオピニオン報道がやれるか。テレビ報道をゆたかにするためにこれから現場を励まそう。